

<目次>

1. 「時創学」初級編修了を迎えて
2. 「時創学」石川圭一社長との出会い
3. 「時創学」
4. 「時創学」中級編を迎えるにあたり

1. 「時創学」初級編修了を迎えて

昨年1月より私は「時創学」創始者の石川圭一社長に師事し、「時創学」を正式に学習をはじめさせて頂きました。それからおよそ1年経過し、どのような変化がおとずれたかを主観、客観を交えて、まず冒頭ご報告したいと思います。

①. 「時創学」を学ぶことで、より幸せになったか？

「時創学」は“幸福追求の学問、処世術”です。そのため、まず私は現在幸せか？という点について感じたままに述べたいと思います。

私は時創学を学び以前から比べ逆転的に幸せに日々を送っています。

それまでは仕事がうまくいく際はプライベートで不幸せ。またプライベートがうまくいっていると仕事が…という具合にバランスが取れておりませんでした。しかしながら、東霧島神社近郊で実施した年末合宿において「時創学」の中の1原則「自分を取り巻く枠組み」の原則を学び、早速家族との関係のコントロールを意識したことで仕事への妻の協力体制が一層生まれ、仕事が前進している実感をもてています（4月目標達成予定）。

また、仕事のコントロールを意識することで、プライベートへも良い影響が出ており、夫婦でこれまで10年以上共通の趣味をもてなかったのが、“登山”という共通の趣味を持つことができました。登山シーズン中は定期的に山に登ることで、自己の健康という枠組みへの好影響を期待しています。

誤解の無いように申しますが「時創学」自分を取り巻く枠組みの原則だけで幸せになるということではありません。「時創学」初級編で学ぶ諸々の原則の中で私が今ぱっと印象に残った原則を例として述べました。

②. 人間関係における変化

現在、私の周辺には本当の意味での“人間関係”が出来てきました。「時創学」を学ぶことにより日々の過ごし方が変化してきます。結果、これまで疎遠であった方、もしくは決して会うことすら出来なかった著名人が、とても身近になります。また逆に、(ひょっとしたら哀しいことでもありますが) これまで一緒に酒を酌み交わしていたりした方が自然と喧嘩などするわけでもなく疎遠になっていきます。これも誤解の無いように申しますが、決してこちらから取捨選択したりするような傲慢なことでは無いのです。不思議と入れ変わっていきます。

私なりのこれは原因分析なのですが、これまで大変大きな勘違いをしてきました。“人付き合い”とは何なのかという定義です。私がこれまで“人付き合い”と感じていたものは“単に知人として知っていて、挨拶をしたり、酒と一緒に酌み交わしたり”したりするものでした。

「時創学」を学ぶことでこれは違うということに気づきます。すると日々惰性で呑みにいったりする時間がなくなります。自分自身、また時間をコントロールする意識をもち本来時間を費やすべきである、家族、パートナー、友人との時間を大切にしなければいけないのです。

③. ビジネスにおける変化

前述しましたように、私は昨年1月から「時創学」を学びました。本来でしたら「時創学」を座学で学んでから実践編としてビジネスを行っていくのが通例ですが、例外として私自身にプロジェクトを任せてもらいながら実践的に指導をいただきました。

恥ずかしながら昨年の3月～10月までに実施したプロジェクトは諸々失敗の積み重ねでした。入社したスタッフ、ビジネスのパートナーと、最初のボタンの掛け違いから最終的には大きな亀裂となって分裂となる。集客がうまくいかない。局地戦での敗戦の連続が続き、正直、様々な自信が崩れていくのを感じました。しかし今、考えればこれも「時創学」を学ぶために通る道なのかもしれません。この経験を通して私自身の弱点が見えてきました。“ここぞ、という時に一切引かない、妥協しない”という姿勢です。

これに気づいてからというもの、様々な交渉の場などにおいて自分の内なる声が聞こえてきます… “ここぞ、ここは聞き流しては駄目だ。妥協するな”と。

余談になりますが、「時創学」の学習を行うなかで古典の中から引用を行われる場合があります。そのため、空きの時間で“孫子”“韓非子”“孟子”“論語”などを読んでいます。

“孟子”の中の一節

【天のまさに大任をこの人に降さんとするや、必ず先ずその心志を苦しめ、その筋骨を勞し、その体膚を餓えしめ、その身を空乏にし、行ふことその為さんとするところに乱せしむ】

まさに(大げさかもしれませんが) そのとおりだと今、それを感じています。

2. 「時創学」石川圭一社長との出会い

このように良い変化へ導いていただいた「時創学」との出会いについて記載したいと思います。

私、祐恒竜也が「時創学」石川圭一社長と出会ったのは2012年3月でした。その経緯を記述する前に私の経歴を述べたいと思います。そこからお伝えしたほうがよりわかりやすいと思うからです。

1997年に京都の私立同志社大学を卒業し、そのまま教育業界でのベンチャー企業「家庭教師のトライ」、外資系保険会社「クレディスイス」、大手介護会社「コムスン」、九州における塾「ネット」、またその後は「マニュアル生命保険会社」と約15年の間に5社と転々としてまいりました。振り返ってきても別に解雇などになったわけではなく、寧ろ営業成績などもよく、社員の中では比較的優績社員の部類であったのは事実でした。しかしながらどうしても続かない。転職、入社、ある程度の評価を得るものの、何か納得できず退職、転職、入社と15年間その繰り返しであったと思います。

九州における塾を退職し、再び生命保険会社に入社した際は39歳でした。人脈の中からは商談を行い、必要性を感じてもらい保険加入を促していく…。それなりに充実感は感じていましたが、何か物足らなく日々が過ぎ、歳を重ねることに恐怖を感じながら日々をすごしていました。

そんなある日の夜、一人でお酒を知人のお店で飲み鬱憤を晴らしていると、今後の進む道に大きな影響を与えることになった1つ目の普段は決して行わない選択をしました。ほんと安易に、お酒が入り気も大きくなったからか、以前の会社の上司であった恩師に電話を夜中にしてしまったのです。恩師は介護業界最大手専務[一部上場企業]、その後は某介護会社社長と上場企業のトップをされていた方です。某介護会社とは大手介護会社コムスンが事業停止処分決定後その売却先に名乗りをあげ、当時私が赴任していた四国を買取った会社です。その際に恩師とはお会いしていたのです。とはいえ5年ぶりに、しかも夜中に、酔っ払って電話をするなど今考えればゾッとします。しかし彼はしっかり私を覚えてくれ「今度、福岡に行きますから会いましょう」と約束していただきました。

それから数ヵ月後、彼から「薬院のホテルニューオータニで会いましょう」と連絡がありました。当日、ニューオータニの喫茶店に行くと恩師がどなたか別の方と先にお話をされていました。その方が時創学創始者石川圭一社長でした。その後、夕食を食べに行く段取りとなっており、しばらくまだ時間があつたため3名で諸々話をしていました。その際唐突に恩師から次の質問を投げかけられました。この言葉はとても私の印象に残りました。

「祐恒…お前、今幸せか？」

私は即答できず、しばらく間があつたあと、「え。はい…。そうです。」と曖昧に自信を持って答えられませんでした。これが大変悔しく、情けない思いとなって印象に残りました。

その後、しばらく時間が過ぎたのですが、どうしてもそのときの印象をぬぐうことができず、今度はニューオータニで初めてお会いした石川圭一社長へ思い切って電話をしたのです。本来ならなかなか出来ないことでした。私にとっては、その後の人生に大きな影響を与えることになった、2つ目の、普段は決して行わない選択でした。

「お話を聞かせていただけないだろうか？」今でも赤面してしまうようなアポだったと思います。しかしながら石川社長は「いいよ。じゃあ来週〇〇ホテル1Fの喫茶店で。」とあっさりとアポイントを入れていただけたのです。

これが「時創学」、石川圭一社長との出会いでした。

「お前幸せか？」という私にとって急所の質問。そして“各個人の幸福追求”をテーマとしている「時創学」。問題と回答というこれもまた不思議な縁だったと思います。石川社長に言わせるとこれは偶然でもなく、「すけ（私のニックネーム）が幸せに対して問題意識を持っていたので、その行動と結果は必然だよ」と今では言われますが。

3. 「時創学」

石川社長（「時創学」）と出会い、それから約1年3ヶ月が経過いたしました。その間学んだ中で、私にとって特に重要だと思う原理原則について具体例を伴いながら記載したいと思います。これを読まれる方にとっては参考までに、私にとっては決して忘れることがないようという強い意志で銘じたいと思います。

①. 「時創学」生死観

人間の命はもちろん全てのものは有限であるということを強く意識すること。これは決して悲観的なことではなく、逆説的に、むしろ前向きな原則です。命は有限であるからこそ“今”を大切に生きよう、後悔のない生き方をしようということ。この考え方は常に何をするにしても考えの根底にあり、きわめて重要と私は認識しています。“武士道”にもある“武士道とは死ぬこととみつけたり”の考えに通じるものでもあります。

余談ですが、この「時創学」生死観の講義をしていただいた後すぐに、私は妻へ電話をいたしました。なぜなら私たち夫婦間はその日まで原因は忘れましたが1週間ぐらい冷戦状態だったのです。まったく口も聞かず…。そのため、この講義で学んだ後すぐに、もし今私がここで死んだら妻に大変後悔をさせると思い、講義室から外に出て電話をかけようとしたのです。ところが携帯を開くとそこには妻からの着信がありました。電話をしてみて「どうしたん？」とまず彼女の意見を尋ねると、「私がもし死んだら、あなたに後悔をさせると思って」と…。私が言おうとしたことを何故か彼女が言ってきたのです。妻はたまたま別の本を読んでいてまったく同じタイミングで私に電話をしてきたということだったのです。このようなエピソードもあり、この原則は現在私にとって一番大切な、印象に残る教訓となっています。

②. 全てをコントロールする

人間関係、交渉、お金、環境…などすべてにおいて自分の管理化におきコントロールを行うということです。これは非常に傲慢に感じるかもしれませんが、「時創学」生死観と同様に逆説的に私は捉えています。“全てにおいて配慮する”。つまり、人間関係において言うなら、相手の気持ち、立場、環境などに配慮し、お互いにとって WINWIN な関係を保ちながらこちらの要望、提案を提示していく。全てを想定の中で行動していくということです。

私はどちらかというところまで後先考えずに“反応”していたように思えます。何か良くないことがおきると、それが道徳的に正しかろうと無かろうと、自分の意識のままに行動していました。そのため、落とし穴にはまる。結果コントロールされる側にまわっていたのです。過去振り返って転職が良くも悪くも多かったのはその顕れかもしれません。

③. 人を信じない

文字通り人を信じないということです。これは中国古典“韓非子”にも同様な視点が記載されています。しかし、これも同様に逆説的に捉えるべき項目です。つまり人間不信になるのではなく、“自分個人に忠実であり、組織として同一方向に向かう、又、自己の利益結果を出すためには他人に依存するのではなく、コントロールしていく”しかない…。

石川社長から最初この原則を教授いただいた際、大変悩みました。これまで友人、知人、家族に対して文字通り信じないということは、これまでの価値観をひっくり返される思いがし、正直受け入れづらく思いました。しかし、「時創学」を学習していくうちにこの原則の根本が見えるようになってきました。

これら3つの例示いたしました原則は私が語る「時創学」の中のほんの、ほんの一部でしかありません。

4. 「時創学」中級編を迎えるにあたり

これまで述べてきた「時創学」の一部に関してはあくまで原理原則、実践なければ机上の理論です。中級コースからはそれら理論の本格的な実践となります。

“2. 「時創学」との出会い”で申しましたように、一昨年前にニューオータニで人を介して石川社長、時創学とお会いし、その後、半年間ご一緒させていただき株式会社 時創学舎へ入社いたしました。入社してからの一年間、理論、およびビジネスを石川社長に教授いただきながら進めてまいりましたが、失敗ばかり反省ばかりが続いています。失敗をし、反省で気が落ち込むこともあります。あ、また反応してコントロールされている。ここで負けてあきらめてはいけない。”

と自分を叱咤し、自分自身を客観的に見る事が出来ています。

現在、「時創学」一期生は佐藤氏と私の2名です。今年4月から少なくとも2名が加わり、最低でも4名の生徒となります。一期生の立場として新しく加わる2名の見本となれるように日々を大切に学び、引くことなく実践をしまいたいと思います。

新年度もなにとぞよろしくお願いいたします。

以上